



桜鯛

試し読み

## 唐渡の椀

むう、とした湿気が昼間の熱を含んだまま、矢野昌治朗の周りを取り囲んでいた。まるで湿気の手を泳いでいるようだ。風の絶えた川端は水がぬるりと動いて舟を微かに揺らす。船端同士がぶつかる鈍い音以外はしんと静まり返っていた。酒精が入って鈍くなった身体が余計に重く感じる。

「ちよいと飲み過ぎたなあ……」

昌治朗が一人ごちる。真つ直ぐ歩いているつもりだが、ふらりと足取りがよれた。つい最前まで、照降町にある安直な一杯飲み屋で、同じ同心に仕える手下の孝助と飲んでいたので、荒布橋で分かれて、八丁堀の御組屋敷に帰る途中だ。普段は一刻程度で切り上げるが、今日は少し過ぎ過ぎてしまった。

うわあ、と言う声がどこかで上がった。昌治朗は本木材町から海賊橋を渡る手前にいた。一気に昌治朗は酔いを飛ばす。実際に酒が抜けた訳ではないが、町方の中間を勤めているからには、酒を食らっていても、何か事が起これば瞬時にしゃきつとせねばならない。

酔った状態での聞き取りとしても、声の具合から二町(約二百メートル)程離れていると推測する。昌治朗が通り抜けてきた、青物町や万町の方向と思われた。表店の後ろには長屋を構える町屋があり、日本橋界隈でも賑わう一角だ。その上、楓川を挟んだ反対側は、町方の組屋敷が立ち並ぶ八丁堀である。その近くで随分と大胆なことだ。

降ろしていた着流しの裾を手早く尻つ端折りにして、腰の後ろに突っ込んだ十手を確認する。着流しの下は、千種の股引に黒い脚絆。一般的な中間の格好だ。この場合の中間とは武士に仕える者の称ではなく、同心の下に配属される部下であり、奉行所から正式に任命される職だ。同心が個人的に雇っている目明しや、その目明しが個人的に使う手下とはまた異なる存在である。昨年の春にそれまで勤めて居た内役(奉行所内で役務を努める)から、外役へ抜擢されたのだった。

昌治朗は踵を返して用心深く進む。叫び声のした辺りで、人が出てきたらしい。静

まり返った町屋に大声で人を呼ぶ声がした。すると、青物町の角から二、三人の人影が走り出してきた。

「あいつらか……?」

青物町の軒下に寄りながら昌治朗が一人ごちると、すぐさま走り出てきた人影を追うことに決める。襲われた人の方は、既に周辺の住人が出てきている。然るべき手が打たれるだろう。走り出てきた彼等は、何の関係もないのかも知れない。だが、関係ないのならばその場に留まっても良かったはずだ。関わり合いを恐れたのだとしても、何も走り去る必要もない。

——何かおかしい。

彼等の挙動がそう告げていた。走り出てきた人影は、日本橋の袂にある高札場の近くで足を緩めた。月が出ているとは言え、暗い夜のことだ。少し離ればもう安心だと見たのかも知れない。

「日本橋を渡るか……?」

昼日中にはごった返すほどの人が行き来する日本橋だが、流石に夜には人の通りが少ない。高札場と橋の袂をぼんやりと灯す常夜灯が、淡い光を投げかけている。だが、彼等は日本橋へは行かずにそのまま西河岸町の方へ歩み去ってゆく。それを見ながら昌治朗は暗がり一旦入った。尻つ端折りにした着物の裾を戻す。背中から帯に手挟んでおいた十手を、着流しの単衣の下、襦袢の帯に仕舞って紹の羽織を脱いだ。ついでに鬚の先を少し散らして即席の遊治郎に変わる。町屋の多い辺りはとりあえずこれで凌げるだろう。人通りが少なければ、昌治朗のほうも格段に後を追いやすい。が、同時に昌治朗自身も見付かる可能性が多い、と言っつことでもあった。明らかに「町方」の格好では更に目立つ。そこで少し姿を変えたのであった。昌治朗は見え隠れに男たちの追跡を再開した。

男たちはそのまま一石橋を渡り、外堀にあたるお堀端を連れ立って歩いていく。右手の町屋は安直な一杯飲み屋が店を開けているだけだ。中から時折どつと弾けるような笑い声が洩れ聞こえた。左側の御堀の向こうは常盤橋御門内。大名の大きな屋敷が立ち並ぶ一帯で、真つ暗な闇に包まれている。お堀の水の音。流れる水が起こす微かな風が堀端に植えられた柳の葉を揺らす音と、そして少ない人通りの草履の音しかなかった。

やがて竜閑川に掛かる竜閑橋を渡り、鎌倉河岸へと入っていく。白酒ならば豊島屋と言われた鎌倉町を通り過ぎる。普通の酒も取り扱う豊島屋は、店先を開けて立ち飲みをさせている。男たちはそこへ立ち寄り、一杯ずつ升酒を呷った。男たちの一人が店の者に言いつけて提灯に火を入れさせていた。

「二本差しかエ……」

豊島屋の店先へ洩れる明かりから、男たちの格好を見る。紋付の黒羽織は紗か絹袴に裏つきの雪駄。大小を脇に手挟んでいた。面倒な。昌治朗は小さく舌打ちをした。

町方は武家地、寺社地には手出しが出来ない。仮に町屋に潜んでいれば町方でも手出しのしようがあるが、武家地に入り込まれた場合は、証拠を集めて評定所に回してお裁きを願うしかなかった。

せめて、何処の屋敷かだけでも探ろうと決めた昌治朗は、男たちの姿を横目に見ながら、暗闇を渡るように軒下を伝う。彼等は今だ昌治朗の尾行には気がついていないようだ。

本石町で四つの鐘が鳴った。浅草からも夜陰を渡って遠く鐘の音が小さく響いてくる。

男たちは投げるように升を返しながら、足早に立ち去った。間を置いて昌治朗が尾行を開始する。豊島屋の前を通り過ぎるときに、店の奉公人らしき男が「二本差しだと思って偉そうにしゃがって……」とぶつくさ呟いたのを、店主らしき男に窘められているのが洩れ聞こえた。

男たちは、そのまま御厩のある錦小路へ曲がっていく。駿河台まで登った後は、左に折れて表猿楽町を進む。昌治朗はここで大分間を置かずには居られなかった。駿河台、小川町界隈まで入ってしまうと武家地になる。町屋では比較的多かった小さな路地、天水桶や軒下といったものがない。何処までも続く白い壁だけだ。

昌治朗は富士見坂の方へ通りをそのまま渡り、人通りのない角で身支度を変える。鬘を直し絹の羽織を羽織り直す。武家の外出と言え、羽織袴が普通のこの界限で、着流しに羽織の格好は幾らなんでも目立つが、袴などは持ち歩いても居ない。見つかって問い質されるようなことがあっても、何とか言い訳をするより他はなかった。

ほろ酔いの体を装って表猿楽町の通りに入る。男たちとの距離は大分開いてしまったが、遠目に提灯の明かりがぶらぶらと揺れている。昌治朗はそのまま距離を置いた

まま、ゆるゆると歩きながら後をつけた。

武家地が続く小川町界隈はほぼ真つ暗だった。錦小路突き当たりは土浦藩土屋米女正の上屋敷だ。その地続きのお預かり地にあった辻番に掛けられた、提灯のぼんやりとした明かりが最後である。前を行く提灯が道なりに曲がっていく。昌治朗もそのまま続こうとしたその時、左手の路地へ物凄い勢いで引つ張り込まれた。

昌治朗が反応できる前に、口と鼻が塞がれる。後ろから右手の脇の下に手が入り、その手が昌治朗の襟首を苦しいほどに締め付けていた。

「騒ぐな。火盗改めだ」

「っ！」

よもや、町方の天敵、犬猿の仲の火盗改めに、町方である昌治朗が捕らえられるとは情けない限りである。

「騒がれては御用に差し支える。手を離すが大人しゅうして頂こう。暴れば遠慮なく締め落とす」

息が止まるほど襟元を締め上げられて、昌治朗は頷くしかなかった。

襟元を直して辺りを見渡すと、火盗改めと名乗った男はどうやら角から通りを覗いているようだった。昌治朗もなるたけ静かにして角から顔を覗かせる。表猿楽町の路地からはたばたと慌しい草履の音と、提灯の明かりがぞくぞくと集まりつつあった。

「こつちだ。そこもとの尾行はどうに気付かれておたぞ、へタクソ！」

抑えた声で厳しく叱責しながら昌治朗の肘を掴むと、力任せに引つ張って路地を奥へ走り出した。右に左に路地を曲がって、開けた場所に走り出る。神田の明地だと判った。昌治朗を引きずったまま一ツ橋御門の橋まで走り出る。橋の袂に向かつて、男がフクロウの鳴き真似をした。すると、一艘の猪牙舟が静かに滑り出してきた。

「乗れ！」

昌治朗はお上がり場から男に言われた通りに舟に飛び移るしかなかった。続いて火盗改めの男も乗ってくる。猪牙舟がぐらりと揺れた。火盗改めと名乗った男はかなりの大男だったのだ。

「やつてくれ」

「へい」

抑えた声のやり取りで、猪牙がすうと水面を滑り出した。

## かたなふたふり

——丁巳ノ事——

天保八（一八三七）年、アメリカの商船モリソン号が日本漂流民の送還と通商を求め来航した際、これを砲撃し、退けるという事件が起こった（モリソン号事件）。

幕府は外国船に対し警戒を強めており、文政八（一八二五）年に異国船打払令を出している。

ところが、モリソン号は商船であり、非武装だったこと、七人の日本人漂流者を乗船させていたことがわかった。翌九年、この事件について田原藩士で蘭学者でもある渡辺華山が『慎機論』を著し、同じく仙台藩水沢領の医師、高野長英も『戊戌夢物語』でそれぞれに幕府の対外政策を批判したとされ、翌年（一八三九）に逮捕（高野は自首）された。蚕社の獄である。

各藩も幕府のこれにならない、厳しく、なおかつひっそりと抱えの蘭学者、ならびにその門弟を罰したが、なかには冤罪とも思えぬようなものもあった。

松平陸奥守家、仙台藩の若き江戸留守居役、黒田もその一人である。黒田は蟄居を命ぜられた。寄合での蘭学者との同席が「不屈き」なこととされたのである、とはいえ、上級家臣であり、先代藩主の叔母が黒田の出であったため、家老家臣の家に預かりとなった。いづこの藩でも似たようなことは起こっていて、罰するが形だけという藩もあり、仙台藩もそうであろうと誰もが口にせずとも思っていた。いつしかひよっこり解けるもの、聞けば謹慎の期間は半年から三年、短ければ半月、それくらいだろうと親族はもとより、朋輩達も戻りを待ったものだが、その思いはあっさり裏切られた。あるいは、不幸にも忘れられたのかも知れない。

時は流れ、十と幾年も経た嘉永六（一八五三）年、ペリーを乗せた黒船が浦賀に姿を現し、その汽笛を日本中に轟かせたその年、蟄居が解かれる。

黒田桐次郎は齢四十になっていた。

『忍野の三人衆』とよばれる忍者がいる。

出は伊賀とされているが、じつさいにどのかどうか、また富士の麓にある忍野の里にいたからなのかすら、忍びのあいだでは虚実が知れぬ言い伝えのように思われていた。徳川の天下となつてから多くはお庭番として、ほか乱波、突波、透波、軒猿、真田衆など乱世より継がれ、また消えるなど忍びは、太平の世ではこれまでもなお影のように平らかに静かに、音を立てることなく慎ましく生きていた。

「不服そうな顔をしておる」

この三人衆を目の前に小松は目を閉じている。

「……」

床を背に、囲炉裏を前にして同じように背を丸めて座る老忍はどれも似たような姿で、年もよめず、男か女か、口を開いてすら、分らない。なかの一人、中央に座っているのは長で、東雲と呼ばれている。小松は否とこたえた。

「殿に命ぜられれば是非ありません」

「そうさの。…主が、上忍にも捨てられた我らを拾うて抱えてくださらんなら生きちゃおらん」

東雲の左隣の三輪が続ける、もつともなことだった。

忍びは家に仕えないものだ、戦国の乱世はもとより、そういうものだった。過酷な修業のうちにひとのころを失い、忍びはけものになる。ひとはけものとなった彼らを御せなかった。だから忍びとして育てられた地の上忍が仕えるところを采配した。上忍はその土地の郷士、豪農の家で、下忍として彼らを育てる。国は、忍びを備う。古来からそうだ、そうやって生きてきた。備われれば仕えるが、己の技量を差し出す場所であつてそこに忠義ということばはないし、分らない。

が、徳川の世になつて一変した。忍びは家に仕えるようになった、知行を与えられた服部がその祖だという。——とはいえ、服部家はとうにない。

戦のない太平の世になつて伊賀者がどのようにして渡世したかなど小松はそんな大昔のことは知りようもないし、眼前の三人とて同じだろう。なれの果ては武士の家に拾われたのもあれば山伏だとか山賊だとかだろうと聞いている。ただ、言えるのは忍びがけものから人にはなれなかつたことだけだ。百地だか藤林だったか、上忍は幕府のたれか、寺のどこかの怒りを買ひ、元和の年に屋敷ごと燃えたそうであ



る。忍びは同志に気をくばる、しかし、下忍がそこにもほかのどの伊賀者も訪れなかった。のち幕府の耕地検分の折りに僧が来て、卦見が悪く、疫病の禍があるとかで村ごと焼き払われた。祖は逃れるように南へ北へ伊賀から離れ、小松たちは甲賀でもなく山に囲まれたところで暮らしている。

拾われて、すみかを与えられたのだと三老忍は小松たちにおしえた。

「兵庫には早いように思います」

小松は主家である黒田家のためによい忍びになれ、と言われ続けてきた。

「あれとて忍じゃ」

「…しかし、お貸しなされた日鷹が帰りません」

「こまつ」

「日鷹こそ適しているのではないのでしょうか。翁らが貸し出されてもう五年になります。このままでは十分でも与えられてしまうのでは」

「だがの、あちらの家からの金子とて里にはありがたい」

と、三輪が言った。女性の声に聞こえなくもない。

「日鷹は自ずから戻れぬと報せておるのだ。主に詮索もすまい」

「……」

「敵ではないぞ」

下座に控えていた影が被せて続ける、旅装束の商人のなりをしているが、江戸と里を行き来している小松と兵庫二人の教育係だ。気配を消して入っていたらしい。

「周防か」

「若の身を探すのに心許ないようではこまる。銭金はあるに越したことはない」

「まだか」

東雲の問いにこくりと頷く。

「異国船に拐かされてはいまいだろうか…」

と、周防は室を見回して小松に問う。

「兵庫は」

「猪子を追い掛けてます」

「藤吾さまのことは伝えたのだろうか」

「もちろん」

兵庫の答えはただ一つで、それで飛び出して行ってしまった。

「こまつが不承の顔じゃ」

三輪が幼子のような物言いでほたりと落とす。小松は膝に置いた手をきゅつと握ると払うように言った。

「してません」

「こまつはどうじろさまがすきだからの」

くくと忍び笑いが聞こえる。

「どうじろさまは来られぬ、了簡しや」

「わかっております」

わざわざ手紙までもいただいているのに文句など小松にはないし、そもそも役目なのだ。三老はひとがわるい。

「ぬしは黒田の『お庭』なのだ、兵庫もそのように教えた」

それでも小松は金子で己が黒田に飼われているような気がしてならない。周防や、長たちのように割り切つて思うことはできぬままこまできてしまった。桐次郎を主とは思つてはいるが、いざ命ぜられて他様が主になつたとしてつとめられるか、わからない。

「黒田はな、貸し出すものではない」

ゆつくりと論すように東雲が口を開いた、声は幼いまでに若い。

「ぬしがお守りせねばならぬ殿の宝じゃ」

主家があつてこそのお庭番——忍びである、親族から身を守つて欲しいと主から直々に頼まれれば、命に代えても、たとえ一族の掟に背くとしても、果たすのみである。

「…はい」

小松も知らぬわけではない。黒田の家には恩がある、忍びでしかないものに、一介の藩士でしかない男が、生き残るよう生きろと諭し、その生業の仕方を教えたのだ。援助は受けていたが、黒田の先代、またその嫡子の桐次郎にあつては何度も里に足を運び、足が途絶えてもささまを与えられ、おしえられた。

「しかしの」

笑う声をする。

## \* お願いとおことわり \*

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: [nedocoya@gmail.com](mailto:nedocoya@gmail.com)

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)